

---

# B e l t i s

海土龍

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Beltis

### 【Nコード】

N6341D

### 【作者名】

海土龍

### 【あらすじ】

18歳になったら性別が選べる。男になるか、女になるか。エルドが男になると言うから、ベルティスは女になることを決めた。だけど、エルドは本当にベルティスのことが好きなのだろうか？ かなか「好き」と言ってくれないエルドに、ベルティスは……。

## 1・流離う者たち

無数の光の欠片が散らばった暗闇の世界。

分厚いガラス越しに手をかざすと、暗闇はひんやりと冷たく、徐々に体温を吸い取っていく。

いつ眺めても変化がない。だが、ベルティスは知っている。

光のような速度で移動している自分たちを囲む景色は、刻々と移ろいで行っているのだと。

景色。果たして、景色と呼べるほどのものだろうか。

窓の外に広がる景色は常に星空だ。頭上はもちろん足下も。

透明ガラスで造られた床と壁に囲まれたこの場所に立つと、宇宙空間に放り出されたような錯覚に陥る。

だけど、好きなのだ。この場所が。

怖いと多くの友人たちが言うように、めったに人が立ち寄らない場所だから、一人で考え事するには打って付けの場所だった。

胸が苦しい。近頃特に膨らんできている気がして、憂鬱だった。

身長はとうに止まってしまっている。声は一向に低くならないし、細い手足や腰も視野に入る度に気が滅入った。

別に今更、男になりたいなんて言わないけどさ。

お前は女になるしかないと言われているようで癪だった。

実際、周りは皆、ベルティスが女になると思っている。疑いやしない。

ドアを開けてくれたり、荷物を持ってくれたり、人が聞いたら羨むような待遇だけど、そういう女扱いをされることが堪らなく悔しかった。

まだ女になったわけじゃないのに。

18歳になると、性別が決められる。それまでは男でもなく、女でもない。また、男でもあり、女でもあった。

ベルティスたちの祖先が地球を脱出してから三世紀ほどが経っているが、未だに自分たちは目的地に到着できていない。

おそらくベルティスが生きている間に到着することはないだろう。目的地の土を踏むのはベルティスの数代先の子孫たちだ。

このことは既に三世紀前に地球を出る際に計算済みのことで、故に船には新人類たちが乗り込んだ。

成人後、ホルモン剤を飲むことで男女の性別を持てる新人類は、隔離された世界での男女比の問題を無くした。

男の数が減れば、男となる子どもを増やせばいいだけの話だからだ。また、その逆も然り。

今のところ、巨大な船の七割方が無人工リアである。

船に乗り込んだベルティスたちの祖先の使命は、目的地に着くまでに人口を増やすことである。

この使命はまだ当分は達成されそうにもなく、自然、ベルティスたちへと受け継がれてきた。

ベルティスはガラスの壁に寄りかかり、足を前に放り出すようにして腰を下ろした。

膝上丈のスカートのような物を履いているため、脹ら脛は直にガラスに触れる。

するとその部分は、元々体温が低いせいもあって、すぐにガラスと同じように冷たくなっていった。

躰が徐々に凍っていくようだ。

エルド。

呟くように、今一番会いたい相手の名前を呼んでみる。

迎えに来てくれたら、それで善し。来なかったら一生ここに居たっつていい。

そんな気分だった。

船が地球を脱出してから、もうずっと船内の男女比は三対七に保たれ、一夫多妻制の社会が築かれている。

女は子を十ヶ月その腹で育て、その間生殖活動ができないからだ。

それなら、どう考えても、女より男になった方が得だ。

女は子を産む道具という見方をされている現実も、生まれてきたからには男になって人生を楽しむべきだという考え方に結びつく。ベルティスだって幼い頃は当然のことのようにそう考えていた。いつの間にか、男にならなくてもいいやと思うようになっていたのだけだ。

女になりたいわけではない。ただ、エルドが男になると言っているから、ずっとエルドと一緒にいるために、自分は女になった方がいいのだろうと思っただけ。

エルドもベルティスは女になるものだと思われて疑われない一人だ。エルドは、自身は男になって、ベルティスを女にして、そうして夫婦になるつもりでいるのだろう。

それは構わない。エルドが好きだから。

だけど、なぜか気に食わない。

女に与えられた権利はただ一つ。夫を自分で選べる。

男に求婚されても女はそれを断ることができるが、女から求婚されたら男は断ることを許されない。

一夫多妻制の社会で、ベルティスはエルドだけのものになれるが、エルドはベルティスだけのものにはならないだろう。

エルドがベルティス以外の妻はいらないと言っても、エルドの妻になることを望む女が現れたら、エルド自身にもベルティスにもどうしようもないのだ。

それに何よりもベルティスの頭を悩ませることは、エルドが気の多い性格であるということだ。

最終的にはいつもベルティスの元に戻ってくるのだが、ふと気付くと、他の誰かと姿を消していることがある。

エルドがベルティス以外の妻はいらないなどと言う可能性は零に等しいように思う。

堅い靴底がアルミ製の簡易階段が上がってくる音が響いて、ベルティスは気のない視線を数メートル先へと送った。

ガラスの床に半畳ほどの入り口があり、階段が取り付けられている。

階段を下りると、高等学校の廊下の端に繋がっており、廊下を少し歩くと教室にたどり着く。

今の時間、授業中だが、教室はガラんと静まりかえっているはずだ。

体育という科目だが、格闘技の授業の時間なのだ。

力の強い者が男になる。力の強さが生殖能力に比例しているか否かは定かではないが、そうだと思われるため、強い者が男になる。

毎年ある時期、18歳以上の者が参加するレースがある。

別名を喧嘩レースというのだが、これの上位数名が男になれるというレースだ。

体育の授業は、この喧嘩レースに向けた喧嘩の練習と言ってもいい内容なのである。

男になる予定のないベルティスには関係のない授業だ。

いつもなら武道場の上に設けられた観覧席で見学しているのだが、今はそんな気分じゃない。

レースが行われる日が近付いているせいだ。

きつとエルドはそのレースで勝ち進んで男になるのだろう。

そうしたら、自分はどうなってしまふのだろうか？

気が滅入る。

カッソ。カッソ。カッソ。

甲高い音を響かせながら階段を上がってきた人物は、床に座り込むベルティスの姿を見つけて、一瞬頬を緩め、すぐに眉を顰めた。

「珍しいな、お前が授業をサボるなんて」

「出ても仕方がない授業だったから。どうせ見学だよ？ エル

ドこそ体育なのにサボるなんて珍しいね」

「だって、お前いないし」

エルドはやや乱暴な口調でそう言うと、ベルティスと並ぶように

腰を下ろした。

「ケツ、つめてえー」

エルドも膝丈スカートのようなものを履いていたが、更にその下に長ズボンを履いているので、ベルティスよりは体温を奪われないはずだ。

ベルティスの躰はすっかり冷え切っている。

そうと気付いたエルドはベルティスの腕を掴んで顔を顰める。

「何やってんだよ」

腕を引かれ、エルドの膝の上に座らされて初めて足の感覚が鈍っていることにベルティスは気が付いた。

エルドの大きな手が脹ら脛は温かくさする。次に背中を撫でられ、髪を梳かれた。

こんな風に包み込まれるように抱きしめられると、同い年なのに同い年とは思えない体格の差を思い知る。

エルドがベルティスを女のように扱えば扱うほど、ベルティスは女になっていくのだ。

ホルモン剤なんて貰わなくても女になれてしまうかもしれない。

エルドに初めて抱かれたのは十三歳の時だ。それ以来、身長が伸びなくなってしまった。

声が低くならないのも、手足や腰が細くなってしまったのも、すべてエルドのせいだ。

男になることを諦めた他の友人たちだって、ベルティスよりはずつと背が高く、声が低い。少年っぽさが依然として残っているのに、ベルティスはどう見ても少女にしか見えない。これは、大抵の者は男になることを目指して成長していく中でとても珍しいことだった。

そして、それさえもベルティスの癪に障った。

何もかもエルドのせいだ。

エルドの端正な顔を、きつ、と睨み付ける。

だが、エルドは笑った。ベルティスの金髪を何度も梳き、時々指

に巻き付け、唇に当てながら言うのだ。

「切るなよ」

横たわった時に髪が躰の下敷きになってしまふのが嫌だった。

だから一度、腰下まであった髪をばっさり切ってしまったことがある。

その時のことを思い出して度々エルドは言うのだ。髪を切るな、と。

ベルティスは女になるのだから髪は長い方がいい、というのがエルドの主張だ。

勝手な言い分だが、エルドの好みがそれなら仕方がないと思って従っている。長い髪は邪魔で邪魔で仕方がないけれど。

エルドの吐息が髪に触れる。

「早く女になつたお前が見たい。綺麗なんだろうな」

「……」

「なあ。レースに優勝したら、その場で男性用ホルモン剤と女性用ホルモン剤の両方を貰えるって知ってたか？ 男性用は当然自分で飲むわけだけど、女性用は求婚したい相手に手渡すんだってさ」

レース終了後速攻で求婚できるのだと、エルドは楽しそうに言う。通常だつたら、まずは自分が男になつて、相手も女になつてから、求婚するしないの段階になる。

女性ホルモンの配給は、レースが終わり、男性ホルモンの配給がすべて完了した後、女になる決意ができた者から順に受け取りに行くという形なので、それなりに日数がかかるのだ。

エルドがベルティスの髪を軽く引っ張って弄んでいる。

「俺、ぜってえ優勝するし」

やはりエルドは疑わないのだ。ベルティスが女になると。

女になつてエルドの妻になることを信じて疑わない。ベルティスは小さく息を吐き出した。

「ねえ、エルド。もしも、もしもさ、俺がそれ、受け取らないって言つたら？」

「は？」

「だから、女性ホルモン。エルドからは受け取らないって言ったら、お前、どうする？」

「どうするって……」

呆気にとられている。そんな表情だ。

ほら、やっぱり。エルドは考えもしなかったんだ。

ベルティスはお返しとばかりに、エルドの青みかかった黒髪を引っ張った。

エルドはベルティスには切るなど喧しく言うくせに、自分はいつも短く切っている。

引っ張り甲斐がない。面白くないので、ドンとエルドの胸板を叩いてやった。

「今更、男になりたいなんて言わない。女になるしかないと思う。

けど、エルドの女になるとは限らないからな」

「おいつ。それ、どういう意味だよ！」

吊り上がったエルドの眉を見て、ベルティスは罵声を浴びる前にエルドの口を両手で塞いだ。

ベルティスには優しいエルドだが、根は短気なのだ。そして、怒ると非常に怖い。

真正面から彼の怒りと向き合って疎まない者はないだろう。

ベルティスだって怒っているエルドは怖い。

怒らせたくない。第一、今、怒っているのはベルティスの方なのだ。

「ねえ、エルド、知ってる？ お前さ、今まで一度も俺のこと好きだって言ったことないんだよ？ お前、本当に俺のこと好きかわけ

？ 言わなくても分かるだろうっていう態度、腹が立つんだよ。お前の女になるのが当然っていう周囲の目、苛々する。お前だって当然って顔しているだろう？ 嫌なんだ、そっぴいの」

次の子どもを身籠もるために、大方の女は育児を己の手でしない。赤ん坊は二畳ほどの育児室に育児ロボットと共に入れられて、6

歳まで育てられる。

7歳になると初等学校に入学するため育児室から出され、実母の手によって育てられた子どもたちと共に学校寮で暮らすようになる。エルドもベルティスも育児室で、育児ロボットによって育てられた。

育児室は隣合う部屋の境はガラス壁で出来ており、隣室であったエルドとベルティスはその部屋を出るその時までお互いにお互いを見つめて暮らしてきたのである。

触れ合えない。だけど、お互いのすべてを知っている。

ガラス越しに言葉を交わすこともあった。

ベルティスには逆隣りがあったが、端部屋であったエルドにはベルティスしかいなかった。

エルドのベルティスへの想いは、刷り込みなのかもしれない。

雛鳥が孵化して初めて見たものを親だと思うもの。

エルドが見た初めての人間がベルティスだった。ただそれだけの理由で、エルドはベルティスに執着しているのではないだろうか。

執着。 そうだ、執着だ。

愛とか恋とか、そんな甘いものがこれまでに自分たちにはなかったように思う。

好きだつて囁く前にエルドはベルティスを抱き寄せていたし、好きだつて聞く前にベルティスはエルドに身を委ねていた。

好きだつて言われたことがない。

当然のことのように自分の傍らにいるエルドが憎たらしくて堪らない。

胸が痛い。

なんでエルドはこんなにも自分を苦しめるのか。

たった一言。好きつて言ってくれたら、それだけでいいのに。

エルドが他の女をどれだけ抱こうと、その度に好きつて言ってくれたら、どんな辛くても堪えられるのに。

ちゅう、とベルティスの手のひらが鳴る。

エルドの口を塞いでいた手のひらにキスを受けたのだと気付いて、ベルティスは慌てて両手を引っ込めた。

エルドが笑う。やはり、どこか楽しげだ。

「教室に戻ろう。そろそろ体育の授業が終わるところだろ」

「……」

「それとも、次の授業もサボるか？」

無言で首を横に振った。すると、エルドは軽々とベルティスを両腕に抱き上げ、立ち上がった。

階段の方へと歩き始めてしまったエルドに、ベルティスの瞳は陰った。

結局、エルドは言ってくれなかった。

絶望に似た感情をどこに向けて良いか分からず、ベルティスはガラスの外側の冷たい世界を見やった。

暗闇に散った光の欠片。

虚ろに瞬く星々は次第に滲んで見えなくなってしまった。

## 2・疑う想い

香水を顔面に吹き付けられ、大きく咳き込んだ。

ラシユ又は良い香りだと言うが、ベルティスはちっともそうは思わない。

トイレに置いてある芳香剤のようだと言ったら、冷やかな目で見つめ返された。

「あんたつて、ガキね。エルドに同情するわ」

ラシユ又はベルティスから、ふいっと目を逸らし、机の上に化粧道具を広げた。

出会った時のラシユ又は皆と同様、男になりたいのだと言っていた。

すらりと背が高いラシユ又は、涼しげな顔の作りをしており、男になればさぞかし美青年になるだろうと思わせた。

だけど、二年前。体力の限界を感じたと言って手にしていた模擬剣を床に投げ捨てる、武道場を去った。

以後、ベルティスと共に体育の時間は観覧席で見学するようになっていた。

ラシユ又は手鏡と睨み合って睫毛に何か黒々とした糊のようなものを塗りたくっているその隣で、ベルティスは自分の机に頬杖を付いた。

男になるのを諦めたとたんラシユ又は化粧をし始めた。服装もガラリと変え、どう見ても女だ。

ラシユ又と一緒にいるといろんな人が話しかけてきて、ラシユ又の気を惹こうとしているのが分かる。

女ってというのはそういうものなのだ、とラシユ又は言う。

化粧をして、綺麗な服を着て、甘い物を食べる。

できない、やれない、分からないと涙を潤ませて、相手の腕に己

の腕を絡ませる。

そして、意味ありげに微笑んで、いい男を手ぐすね引いて捕まえるのだ、と。

だけど、ベルティスにはエルドがいるのだから、そのような真似をする必要がないのだとラシユ又は続けた。

ラシユ又はコトンと小さな音を立てて手鏡を机の上に置くと、ぱつちり開いた瞳でベルティスに振り返った。

「あんたがいつまでもガキなのは、きつとエルドのせいね。エルドがあんたから何もかもを遠ざけているから」

あんた、知ってる？とラシユ又は声のトーンをわずかに低めて、目を細めた。

「あたしがこうしてあんたと話をしているのはね、あたしが男になるのを諦めたからよ。二年前、まだあたしが武道場で剣を振り回していた時は、とてもじゃないけど、エルドが怖くてあんたには近づけなかった」

「エルドは確かにすぐ怒るし、怖いけど……」

「あんたが言う怖いのは比じゃないわよ、あれは。ベルティス、あんたはね、中等部の時からすごく目立った存在なのよ。誰よりも小柄で、誰よりも可愛い。手首だつてこんなに細いし、肌も透き通るように白い。あんたを初めて見た時、こういうのが女の子なんだつて思ったもの」

ラシユ又もベルティスたちも本物の『女の子』というものを知らない。

船には女の子も男の子もいない。いるのは、男か女か、性未分化の子もただだからだ。

本物を知らないラシユ又たちが、13歳で少年らしさを失ったベルティスに『女の子』を見たとしてもそれは仕方がないことだった。

実際、ベルティスは誰よりも少女らしく可憐で、華奢だ。

「本当に気が付いていなかったの？ みんながみんな、あんたに話しかけたがつっていたのに。同級生はもちろん上級生だつてね。そい

つらなことをく追いかけていたのよ、エルドは

「なんでそんなこと？」

「あんたを他のやつに取られたくないからでしょ！」

なぜそんなことも分からないのだ、とラッシュヌの眼が吊り上がる。ただ、失敗ね。あんたはエルドしか知らない娘になってしまった。だから、他の男への対応が分からないし、恋の駆け引きに関してはさっぱりお手上げじゃないの」

「恋の……駆け引き？」

「エルドの浮気相手たちを思い出してみなさいよ。みんな大人っぽかったでしょ？ あんたに足りないものを他で求めている証拠よ」

浮気という響きを耳にして、ベルティスの心はズンと重くなった。谷の底に沈められた気分。

浮気。 本当に浮気なんだろうか？

エルドは未だにベルティスに対して、好きと言ってきてくれない。エルドのベルティスへの想いは、幼い頃から所有していた玩具を他の誰かに奪われたくないという子どものような執着心なのではないだろうか。

周りの皆はエルドとベルティスが結婚することを当然のことのように思っているから、エルドの行動を浮気だと言いつつ表すけれど、本当は、エルドは本物の恋を探しているのではないだろうか。

ベルティスではない他の誰かと本物の恋を。

好きだと言ってくれないのは、好きだと言えないから。

心にもなく好きだなんて言えない。そう、エルドは思っているのではないだろうか。

ベルティス、と呼ぶ声が聞こえて、動揺で揺らいだ瞳をラッシュヌに向けた。

「だからね、ベルティス。あんたがほんの少し努力したら、エルドの浮気性は治まると思うのよ」

「別に」

尚も言い募ろうとしたラッシュヌの言葉を遮って、ベルティスは頭

を左右に振った。

「一夫多妻制の社会なんだし、エルドが他の誰と何をしていようと俺に何か言う権利なんてないよ」

「権利なら十分にあるじゃない」

「ないんだつてば！　だって、俺、まだエルドと結婚するとは決めていないから！」

「はあ？　決めてない？　どういうこと？」

エルドとは結婚しないかもしれないと告げると、ラシユ又は信じられないとばかりに眼を大きく見開いた。そして、呆れ顔だ。

「それ本気？」

やや低めた声を響かせたラシユ又は、他の者に会話が聞こえないようベルティスに顔を近付ける。

「もし本気なら、あんたがフリーになったこと、それとなくみんなに宣伝してあげるわよ。あんたを物にしたたってやつなら大勢いるからね。うざったいほど群がってくるに決まってるわ。でもね、ベルティス。一時の感情で口にしたことなら、あたしを最後にするのね。他の誰かに言ってはダメ」

「なんで？」

「あんたの無責任な言葉は、周りにいる多くの人を不幸にするからよ」

それつきりラシユ又は黙り込んでしまった。

化粧道具を手早く片付けると、ベルティスを置いて教室を出て行った。

すでに本日の授業はすべて終わり、放課後である。

ラシユ又と話し込んでいる間に他のクラスメイトたちの姿は無くなっていった。エルドもいない。

寮の自分の部屋に戻ろうかと思っただが、そんな気分ではなかった。

武道場にいるかもしれない。

レースが近い。男になるためのレースに勝つために、エルドは武道場で体を動かしているかもしれない。優勝するのだとか言ってい

た。

レースは、1対1で戦うトーナメント方式である。刃を漬した模擬剣を手渡され戦うことになっているが、素手で戦っても良いことになっている。故に、喧嘩だと言われるのだ。

エルドも剣を扱うよりも素手で相手を殴ったり蹴ったりする方が得意なのだと言う。

得意。これは、嘘だ。

本当は、以前、刃を漬していたにも関わらず、エルドは模擬試合で剣を使用して相手の片腕を切断してしまったことがあるから、必要以上相手を傷付けてしまうことが怖くなってしまったのだ。

もちろん、エルド本人がそう言ったわけではない。

そんな素振りチャリとも見せないが、何となくベルティスには分かっていった。

教室を出て、武道場に向かう。教育施設は大方同じエリアに固まって設けられているが、武道場などは一般使用もされるため、教育施設のあるエリアAと大人たちが生活しているエリアBやエリアCの中間地点くらいにある。

区分としてはエリアBということになっているが、武道場までの距離はベルティスたちの教室からけて遠いというわけではない。

直線廊下を数十メートルほど突っ走って、エスカレーターを三階分駆け下りれば、授業と授業の間の10分休憩で行き着けないこともない距離だ。

もつとも、そうして走っても、ベルティスが授業開始に間に合ったことは一度もないが。

エスカレーターを三階分下りてしまうと、武道場の入り口に着いてしまう。その上の観覧席に行くためにはエスカレーターは一階分下りればいい。

観覧席は武道場を囲むように設けられ、斜め上からの観戦が可能になるように造られている。

客席の数は、約三千席。剣道や柔道なら16面、バレーボールな

ら6面分の広さがある。

初等部生から大学生まで使用するとは言っても、教育施設としてだけの使用ではもったいないと主張し、一般開放を決めた当時の知事の思いが痛いほど分かるような武道場である。

要するに、立派すぎるのだ。

客席列の間を通り、手摺りに寄りかかるようにして観覧席から武道場を見下ろした。

エルドの姿を探す。

数メートル下方で好きずきに躰を動かしている者たちは皆、人差し指程度のサイズをしていた。

50人？ いや、100人くらいいるだろうか？

ベルティスたちの学年は140人いるから、その三割というと42人。

この内で42人しか男になれない計算になる。そして、残り98人が女になるのだ。

小さくしか確認できない大勢の中から、ベルティスは青みかかった黒髪を見つけることができた。

誰よりもしなやかに動くその人は、おそらく自らの意志とは関係なしに、ベルティスの眼を一瞬で惹き付けた。

エルドだ。

呟くように名前を口にすると、ほんわかと胸が熱くなる。

もつとエルドの姿をよく見ようと、手摺りから身を乗り出した。

エルドは上級生に相手をして貰い、剣の稽古をしている様子だった。

その上級生はエルドよりも体格がいい。動きも敏捷で、彼が剣を押し出す度に、エルドの表情が歪むのが分かった。

確か、彼の名前はキルクスだ。二つ年上で、二年前のレース優勝者。

エルドと仲が良いらしく、一度だけエルドを介してベルティスも彼と話したことがあった。

あの人、もう男なんだ。

レースで優勝したっていうことは、そういうことなのだ。だから、あんなにも筋肉の付き方が違うのか。

エルドが豹なら、キルキスは虎だ。太い腕が力一杯剣を振り下ろす姿がベルティスの眼に映った。

不意に呼ぶ声があつてベルティスは彼らから目を離した。振り返ると、マーフがそこに立っていた。

「落ちるよ、ベルティス」

マーフの腕がベルティスの腹の下に潜り、ベルティスの躰を手摺りから引き離す。

肌が触れあつたその瞬間、マーフから甘い香りが漂ってきた。思わず、ベルティスはマーフの顔を仰ぎ見た。

「マーフ、もしかして香水つけてる？ まさか化粧もしてない？」  
驚きに満ちた表情を向けると、マーフは気恥ずかしそうにベルティスから目を逸らした。

「やめにしたんだ、男になるの」

「え！なんで？」

だって、マーフは授業中よくエルドと組んで模擬試合をやっていたではないか。

お互いにお互い以外では相手にならないから、毎度そのような組み合わせになつてしまっていたのだが。

つまりはエルドと同じくらいにマーフは強いのだ。

当然、男になるものと皆に思われていたし、本人もずっとそう言っていた。

それなのに、なぜ？

マーフの顔を凝視したまま固まってしまったベルティスに向かって、マーフは薄く微笑んで、だが、やはりすぐにスツと目を逸らした。

エルドと同じくらいに背が高いマーフ。

エルドと同じくらいにしなやかな筋肉がついているマーフ。

銀色の髪は、やはりエルドと同じくらいに短く切られている。

「本当に女になるわけ？」

「そう」

「なんで急に？」

「エルドのせいだよ」

「エルド？」

「あいつ、俺と手合わせしている時いつも手を抜いていたんだ」

ぐっと悔しそうにマーフは下唇を噛みしめた。今にも裂けて血が吹き出てくるのではないかというくらいに。

「マーフと手合わせしている時、エルドは剣を使っていた？」

「当然だろ。レースの練習の手合わせだ。本番では剣を使うのだから、剣で練習するものだよ」

それならきつとマーフの言うとおりエルドは手を抜いていたのだらう。マーフを傷付けないように。

だけど、その優しさはマーフの自尊心を傷付けた。

「エルドには勝てない」

「でも、上位者になれば男になれるだろ？」

「一人でも勝てない奴がいるのなら、俺は男にはならない」

「本気？ 勝てない相手はエルドだけなんだろう？」

「だから俺はエルドの女になる！」

大鐘が脳内で響き渡った。古典的な表現だけど、まさにそんな感じ。

マーフの爆弾発言を耳にして、ベルティスの思考回路は一瞬にしてぶっ飛んだ。

軀を硬くしているベルティスの隣で、マーフは言葉を続ける。

「エルドと対等の勝負ができるのは、俺たちのクラスで俺だけだと思っていた。エルドの相手が務まるのは俺だけだつて。だけど、あいつは手を抜いていたんだ！ それって、すごく俺を馬鹿にしていると思わないか？ 俺はあいつを親友だと思っていたのにさ、あいつは俺なんて眼中になかったんだ！」

マーフの視線が下る。その先にはキルクスと剣を交えるエルドの姿があった。

「エルドのあんな必死な顔。俺、見たことない。俺ではああいう顔させられないんだな。そう、思ったら悔しくて。悔しくて。悔しくて。胸が苦しくて。俺、エルドが好きなんだって…思い知った」

ラシュヌもそうだが、男になるのをやめたとたんに女らしくなるから不思議だ。

マーフの胸の苦しみはベルティスにも覚えがあるもので、マーフの銀色の瞳が切ないほど、ベルティスの心も締め付けられた。

「エルドのことが本当に好きなんだな」

ポツリと口になると、マーフの顔がくしゃりと歪んだ。

「エルドはベルティスを愛しているのにな」

「……」

「愛なんていらぬ。ただ、ずっと。これから先もずっとエルドの傍にいたいんだ。女になればそれが叶うだろ？ 女からの求婚は断れないことになっているから」

「マーフはエルドと結婚したい？」

頷くマーフにベルティスの胸は鷲掴みにされる。息が苦しい。肺が圧迫されて、呼吸ができない。

震えるな！

ガクガクと笑う膝に心の内で叱咤する。ごくりと咽を鳴らすと、少しだけ息がしやすくなったようだ。

マーフと自分は同じだ。

ベルティスだって、ただずっとエルドの傍にいたいから女になってもいいと思った。

エルドの傍にいて、エルドに自分を見て貰いたいから、女になろうと思ったのだ。

マーフと自分は同じ想いだ。それなら、マーフの想いを否定することも拒絶することも、ベルティスにはできない。

それどころか、むしろ、マーフの想いが自分と同じ過ぎて、分  
りすぎてしまって、切ない。

マーフが幸せになるといい。マーフがエルドと。

そんな考えさえ浮かんでくる。

ベルティスには好きだと言ってくれないエルドもマーフが相手な  
ら告げるかもしれない。好きだって。

エルドはマーフを傷付けまいと剣を交える時に力を抜いた。それ  
は、エルドはマーフを大事に思っている証拠だ。

マーフにならエルドは言うかもしれない。好きだって。

ベルティスには手に入られない言葉をマーフなら手に出来るか  
もしれない。

それなら、ベルティスは？ 自分はどうする？

好きだと言われない苦しさを抱えて、エルドの妻になるのか？

嫌だ！ そんなの堪えられない！

ベルティスは遠いエルドの姿を目に焼き付けながら、隣に立つマ  
ーフに向かって静かに言葉を放った。

「エルドは俺のこと何とも思っていないんだ。俺たちは結婚なんて  
しない」

### 3・言葉の波紋

絶句した。

何も言えなくなるという状態が本当に実在するのだと、ベルティスは生まれて初めて知った。

ハオマの顔を見つめ返す。ハオマはまるで己が言った言葉の意味が分からないというような顔でベルティスを見つめていた。

「違うの？」

淡い桜色に塗られた唇が音を発する。声は低くもなく、高くもない。

少年にも少女にも見えるハオマの髪の色は、深緑色。頭の後ろで、縄のように長く三つ編みにしてある。

隣のクラスのアータルを好きになったから女になることにしたのだと、ハオマがベルティスに告げたのは半年前のことだった。

だけど、ハオマの髪はそれよりずっと以前から切っていないという。

「なんで、そのことを？」

「昨日、武道場でベルティスとマーフが話しているのを聞いちゃったって子がいるのよ。もう、みんな知ってる。エルドもね」

ほら、とハオマが指差したのは、数メートル先の廊下の壁。コンクリートではなく、アルミに似た柔らかい素材で出来ている。とは言っても、そう容易には穴があかないようにできているのだが、そこには無惨にも大穴があいていた。

「エルドがやったわけ？」

「すごい音がしたのよ」

やったのか。

怒りを拳で表現する性格は、幼い頃から変わっていない。

穴のあき具合でエルドの怒りの程度が分かって、ベルティスは思

わずソツとする。

武道場でのベルティスとマーフとの会話。それはつまりベルティスの、エルドとは結婚しない宣言のことだ。

昨日のことなのに、すでに広く広まってしまっているらしい。

そのせいか今朝からやたら視線を感じる。そして、振り返ると、まるで幼い頃にやった遊びみたいに、皆そっぽを向くのだ。お前のことなんて見ていないとばかりに。

教室に入り、自分の席に座ったベルティスを追って、ハオママ近くの椅子を引き寄せて座った。

「それで、その話は本当のことなの？」

焦れたように、ハオママは先ほどの問いを繰り返した。ベルティスは今度の問いには、間をおかずに大きく頷いた。

「うん。本当だ。俺はエルドとは結婚しない！」

そう、ベルティスがきつぱりと言いつつその直後、教室中にごよめきが起こった。

驚いて振り返ると、いったいいつの間になんかに集まっていたのだろうか。ベルティスとハオママを囲むように人だかりができていた。

「うわっ。本当かよ！」

「信じらんねえ。あのエルドが振られたってことか？」

「ベルティスのフリー宣言だ！」

単純に驚いている者。頬に朱を走らせながら歓喜の声を上げる者。皆、口々に何か叫んでいる。

よくよく見ると、人だかりは教室内に収まりきらず、廊下にまで広がっていて、ベルティスを唾然とさせた。

なんで？

そんなに騒ぐことなのだろうか？

ベルティスはただ、エルドとは結婚しないと云っただけなのに。

ざわめきは収まる気配がない。その中心が自分だということが、なんだか居たたまれない。

だが、それは突然。ざわめきに色があるとしたら、その色が急に

変貌した。

人だかりの外側から徐々に後方を振り返って、身を引く。道が出来るのと、その道をベルティスのいる方へと歩んでくる者があった。

アータルだ。

まず目に飛び込んでくるのは、鮮やかな赤い髪。それから、キラキラと輝く黄金色の瞳。

浅黒い肌はますます彼の存在感を強くしている。空気の色を変えたのは間違いなく、アータルだ。

アータルは猫のような眼を周囲に向ける。それだけで、群がっていた他の者たちは皆、何か舌触りの悪いものを口にしたような顔をして、それぞれの方向へ散っていった。

ベルティスの正面に立ったアータル。その背後にはアータルの三人の取り巻きがいる。

「よう、ベルティス」

軽い口調の挨拶。だが、ベルティスがアータルと言葉を交わすのは、この時が初めてだ。

クラスが違うということもあるが、エルドがアータルと気が合わない様子を見せるので、ベルティスもなるべくアータルとは関わらないようにしていた。

だけど、噂だけはいろいろと聞いている。ベルティスたちのクラスではエルドがそうであるように、アータルたちのクラスではアータルが誰からも一目置かれるリーダー的存在なのだという。

授業内での模擬試合は負けなしで、上級生たちの間では、今年のレースでエルドが優勝するかアータルが優勝するか賭けになっているらしい。

ちらりと隣に視線を向けると、ハオマが突然現れた憧れの人物の顔を凝視していた。

ベルティスの知るアータル情報はハオマ経由のものがほとんどだが、ハオマの性格上、ハオマもアータルと直接会話をしたことはないのだろう。

目の前のアータルが幻ではないことが分かり、一瞬にして八才マの顔が赤く染まった。

もう一度名前を呼ばれて、ベルティスはアータルを仰ぎ見た。

アータルの顔に淡い微笑みが浮かぶ。そして、次の瞬間。スツと身を屈め、ベルティスの右手を取ると、その甲に唇を押し当てたのだ。

「なっ。何すんだよ！」

慌てて自分の右手を取り返す。強く何度も手の甲を擦ったが、アータルの唇の感触は肌に染み付いてしまったかのようにしつこく、取れてくれない。

嫌だ。

じわりと眼の奥が熱くなった。抑えがたい嫌悪感。エルド以外の唇が自分の肌に触れたのだ。

「ふざけるな！」

荒げた声と同時にやってきたのは、怒りだ。かつと頬を朱に染まり、今にも全身が発火しそうなくらいな憤りを感じた。

だが、アータルの表情はベルティスとは対照的に涼しげだ。ニツと笑う。

「ふざけてなんていないさ」

「なら、どういっつもりだよ！」

「好きなんだ」

お前が、とアータルは続けた。

「エルドとの婚約は解消したんだろ？ だったら問題ないよな？」

俺の女になれ、ベルティス」

反応することができなかった。気が付くと、アータルの唇が自分のそれと重なっていた。

ガタン、と椅子が鳴る。ベルティスはアータルの躰を力一杯突き飛ばし、立ち上がった。

睨み上げると、己の唇を指でなぞって笑みを浮かべるアータルと目が合った。

「返事はレースの後でいい。俺が優勝するから、俺の手から女性ホルモンを受け取ってくれ」

俺のために女になれ、と言い残して、アータルは取り巻きと共に去っていった。

ガタン、と再び椅子が鳴る。足の力が抜けてしまい、半ば椅子に吸い寄せられるようにして、ベルティスは腰を下ろした。

ぐったりと背もたれに寄りかかる。怒りの元凶が消え去ると、ズンと疲労感が襲ってきた。

それから、今更ながら驚きが訪れる。

まさかアータルから、ああいうことを言われるとは思ってもみなかった。

好きだって言われた。アータルに。

どれほどエルドに望んだ言葉だっただろう。エルドがけして言うてくれなかった言葉を、アータルは容易に言っただけだ。

ハツとする。隣に座る人物の存在を思い出して、ベルティスは一気に血の気が引いた。

「ハオマ？」

振り向くと、ハオマはひどく青ざめていた。拳を握り、必死に躰の震えを堪えているように見えた。

「ごめんね。ベルティスが悪いわけではないって分かっているんだけど。でもね、ベルティス。しばらく私に話しかけないでくれる？」

「ハオマ？」

「ベルティスの顔、見たくない」

言っただけで立ち上がり、ベルティスに背を向けた。

引き留める言葉なんてない。教室を逃げるように出て行ったハオマの姿をベルティスはぐつと奥歯を噛みしめて見送った。

それからしばらく、寮の自室に戻ろうとして、ベルティスはその扉の前に山積みされた荷物を見つけた。

二十個くらいあるだろうか。手に乗るくらいの小箱から、とても一人では運べないような大箱まで様々なものがある。

これでは扉が開かない。自室に入れなくて頭を抱えていると、隣室のラシユヌが戻ってきた。

「ラシユヌ！」

天の助けが来たとはばかりに振り返り、ベルティスは啞然とする。ラシユヌの亜麻色の髪がぱつさり切られ、短くなっていた。

普段は、すらりとした身体のラインがはつきり見える服を着ているのだが、今ラシユヌが身に着けている物は、エルドやアータルが好んで着ている物のような身動きの取れやすさを重視したあつさりとした服だった。

まるで少年みたいだ。

「それ、全部ベルティスへのプレゼントみたいだよ」

ベルティスの驚きを無視して、ラシユヌは荷物の山を指差した。しゃべり方もいつもと違う。

低めた声は少年のものだ。

「ラシユヌ？」

「部屋の中に運ぶ？ それとも捨てる？」

「……とりあえず中を確認する」

「なら、運び入れるんだね？」

先ほどからラシユヌと視線が合わない。ラシユヌはベルティスの顔よりもわずかに下方を見つめている。

うつむき加減に無言で、ラシユヌはプレゼントの山を移動し始めた。その様子は、なんだか不機嫌であるように感じられた。

すべての荷物がベルティスの部屋の中に入ると、ラシユヌはそのまま何も言わずに自室に戻ろうとする。ベルティスは慌ててラシユヌを引き留めた。

「ラシユヌ、なんで？」

「何が？」

「……いつもと違う」

ふっとラシユヌが笑みを浮かべた。目が合う。どこか苦しげな微笑は、ベルティスの呼吸を止めた。

「エルドと別れたって。 本気で？」

「マーフが……」

エルドを好きだと言ったマーフ。切ないほどにエルドが好き。その想いにベルティスは共感して、マーフのことを応援したいと思ったのだ。

エルドがベルティスに好きだと言ってくれないのなら、ベルティスはエルドの傍らになんていられない。エルドの傍にはマーフがいてあげればいいんだ。

そう、ラシユヌに言おうとして、言葉が咽の奥に詰まった。

「マーフが何？」

怪訝そうに顔を歪ませ、ラシユヌが低く声を響かせた。

「マーフがエルドのこと好きだって言ったんだ。結婚したいって」  
「だから？」

「……」

ため息が頭上から落ちてくる。ラシユヌの顔を仰ぎ見ると、ラシユヌは明らかに苛立った表情をしていた。

「アリエースもエルドが好きだよ。ナービクもエルドが好き。スワーシャも好きだし、ワユも好き。フワルも、ティシュトリヤも、バフラームも！ラマンも！アシも！」

知っている名前をすべて上げたのではないかと思う程の数だった。

いや、ベルティスの知らない名前もいくつあった。

大きく目を見開くベルティスに、ラシユヌは暗い笑みを浮かべた。「ベルティスが知らないだけだ。エルドのことを想っているのはマーフだけじゃない。マーフよりもずっと以前から、それこそ何年もの間ずっとエルドのことを想っているやつも少なくないんだよ。

ベルティスが気付いていないだけでね」

ドクドクと胸が鳴り響く。血の気の引いた頭に心臓が懸命に血液を送り届けているかのようだ。

再びラシユヌが重たく息を吐き出した。

「マーフがエルドを好きだと言ったから、エルドと別れただって？」

そんなことで別れられるくらいなら、どうしてもっと早く別れてくれなかったんだ！　もっと早く。二年前に」

「ラシユ又？」

二年前？　なぜ二年前なのだろう？

そう疑問に思った時、ラシユ又の表情が変貌した。どくん、と胸が動く。

ラシユ又はベルティスに真っ直ぐ視線を向けて、静かな声で言葉を紡いだ。

「ベルティスが好きなんだ。初めてベルティスを見た瞬間から。

だけど、ベルティスにはエルドがいたから」

近付けなかったのだとラシユ又が言ったのは、昨日のこと。

ラシユ又が今のようにベルティスと話をするようになったのは、ラシユ又が武道場を去った時から。

ラシユ又が男になることを諦めたから、エルドはラシユ又への警戒を解いたのだ。

「ベルティスと話をしてみたかった。少しでも近付きたかった。

あの日。二年前のあの日、おれはエルドと手合わせをして完敗したんだ。エルドには適わないと思いつた。エルドからベルティスを奪えないのなら、男になっても仕方がないと思つたんだ」

そうして、ラシユ又は女になって、友人としてベルティスの側にいることを選んだのだ。

「レースに参加してみようと思う。二年も剣を持っていないから、優勝はおろか、男になれるとも分らないけど。　だけど、もし、おれが男になれば、ベルティス、おれのことを考えて欲しい」

頷こうとしたが、金縛りにあつてしまったかのように身動きが取れない。

頷きたかった。ラシユ又はベルティスにとって一番の友人だし、二年前からずっと近くにいてくれた。

ベルティスの近くについて、ベルティスの無知によって誰よりも傷付けられてきた人物だ。

ラシユヌが自分を好きだと知っていたら、ラシユヌに対してもっと違う対応ができたかもしれない。

今までのことが脳裏に浮かんで消え、再び浮かび、ベルティスは悔いた。

後悔。 いや、それよりも過去の自分の行動すべてが恥ずかしくなった。

なぜこんなにも自分は人の気持ちに鈍いのか。

ずっとラシユヌの側にいたのに、あまりにも自分はラシユヌのことを知らなすぎる。

不意に空気が緩むのを感じた。ラシユヌの顔を見上げると、ラシユヌは微笑を浮かべていた。

「頷かなくて正解だよ、ベルティス。もしも君が頷いたら、その細い首を絞めてやろうと思っていた」

「……どういうこと？」

「マーフに同情して不用意なことを口にしたベルティスが憎いよ。大好きだけだね。でも、許せない。ここでまた、おれに同情し

て頷いていたら、ますます憎らしくなるところだった」

言って、ラシユヌはベルティスに背を向けた。

「万が一おれが男になっても、気にしないで」

去っていくラシユヌの背中。隣室の扉が閉まる音が響くまで、ベルティスはそれを見送った。

#### 4・たった一つの腕輪を得るために

歓声とも罵声とも判断しがたい響きが武道場を支配する。

三千という数があるにも関わらず満席で、通路さえも人で込み入っている。

ひどい熱気。船に季節はないが、この日ばかりは夏が来たかのようになる。

ベルティスも普段より薄着姿で客席に腰を下ろしていた。

隣に座るジブリールは試合の勝敗が決まる度に声を発しているが、逆隣に座るルドナは試合など見向きもせず、観覧席ばかりに目を配っている。

この日、観覧席を埋めているのはベルティスたち学年の生徒だけではない。

上級生や下級生はもちろん、生徒たちの両親の他、出場者とはまったく無関係にも関わらずレースを見に来る者も多くいる。

その内から、ルドナは自分の伴侶を捜すのだと言った。

結婚はもちろん同級生同士だけではない。縁さえあれば、誰を選んでも良いことになっているのだ。

このレースを出会いのチャンスだと言い切ったルドナは、試合そっちのけで良い男を物色することにしたらしい。

「あら。あそこにいるの、アータルのご両親よ」

不意にルドナが声を発し、小さく指差す。この時ばかりはジブリールも試合よりも観覧席が気になったのか、ルドナの指の先に目を向けた。

「どこどこ？」

「あっち。あの、ほら、あそこ」

アータルの父親もアータルのような赤い髪を持っていたが、アータルとはチャリとも似ていない厳つい顔をしていた。

きつとアータルは母親似なのだろう。流れるような金髪をした彼女は猫のような瞳をして、じつと試合の様子を見守っている。

「ベルティスのご両親は？」

来ているの？と聞いてきたジブリールに、ベルティスは黙って首を横に振った。

生んでくれただけの母親は、父親の六番目の妻で、なんとか父親の気を惹こうと必死でベルティスどころではないのだ。

一度だけ会ったことのある父親は、ベルティスが男になるつもりはないと言つと、そうか、という短い言葉をくれた。

生んでくれた母親にはそれなりに感謝しているし、なぜ男にならないのだと聞き返してこない父親にもそれなりに感謝している。

だけど、それだけ。

いるようで、いない存在。それがベルティスの両親だった。

ベルティスはジブリールとルドナに断りを入れると、席を立った。分厚い扉を押し開き廊下に出ると、急に静かな世界が広がる。

武道場から遠ざかれば遠ざかるほど静寂は深まり、無人の空間が続いていく。

レースが開始してから、すでに数時間が経っている。数試合を同時に行うため一日あれば優勝者が決まることになっている。

とは言え、午前中の試合で、同学年の内で飛び抜けて強いエルドが負けることなどないだろう。

エルドを負かす可能性のあるのは、アータルだけだ。

アータルに勝てる可能性があるのもエルドだけだと言われている。そんな二人が戦うのはおそらく午後の最終試合になるだろう。決勝戦。対戦表を見て、作画的にそうなるよう仕組まれているのではないかと思った。

エルドは負けない。そうになると、気がかりはラッシュヌのことだった。

ラッシュヌは剣の訓練を止めてから二年が経っている。ずっと訓練を受けてきた者にラッシュヌが適うはずがない。

気にするな、とラシユヌは言っていた。ベルティスのために戦うのではないのだから、と。

ラシユヌが再び剣をもった理由は、自身の気持ちに整理するため。戦う相手は、ラシユヌ自身なのだ。

そんなラシユヌを止める言葉を、ベルティスは知らない。

気が付くと、ベルティスの足はいつもの場所に向かっていた。廊下の端に立てかけられた簡易階段を上がると、ガラス張りの部屋が広がる。

寒い。

普段よりも薄着をしているせいだと思ったが、違う。凍えているのは心だ。

エルドと言葉を交わさなくなってから、だいぶ日にちが経ってしまっている。

元々不真面目な方だが、ここ最近のエルドはまったく授業に顔を出さない。武道場に入り浸りだと聞く。

武道場にエルドがいるとなれば、ベルティスは何となく武道場から足が遠のいてしまう。顔を合わせづらかった。

第一、会って何を話して良いのか分からない。

エルドが好きだって言ってくれないから。

そう、なじれば良いのだろうか？

だけど、これまでエルドがベルティスに対してしてくれたことを思うと、なじる気力なんてなくなってしまう。

エルドとの婚約破棄宣言をして以来、アータルは何かと付きまわってくるし、誰からとも分からないプレゼントは続々と贈られてくる。

ハオマは口を利いてくれないし、他にも目すら合わせてくれない友人もいる。

人の体温が恋しくなった時、これまでならすぐ傍にエルドがいてくれたのに、今は誰もいない。

こんな時エルドだったら、人を食ったような笑みを浮かべて手を



漆黒の髪。精悍な顔立ちは明らかに男のもので、ベルティスは一瞬怯んだ。

父親や教師以外の男と自分一人で向き合うのはこれが初めてだった。

「君、ベルティスだよな？　ここにいるんじゃないかって、エルドが言うから迎えに来たんだよ」

階段を上りきったキルクスは、ベルティスを見つけ柔らかく微笑んだ。怯えたベルティスの表情を緩めようとしているかのような笑みだった。

二学年上のキルクスは、男になれた多くの者がそうするように、高等学校を卒業後は大学に進学している。

船では高等学校までが義務教育で、大学は通いたい者だけが進学するという仕組みになっている。

進学試験はない。ただし、卒業試験に合格しないと、卒業できない決まりだ。

「迎えて？　どうして？」

仰ぐほど背の高いキルクスをベルティスは首筋をぐっと伸ばして見上げた。

「エルドの奴が、君が観覧席から消えたって騒いで大変だったんだ。すぐに自分の試合が始まるっていうのに、君を迎えに行くって」

「まさか」

「いや、本当のことだ。　きつと君はこの場所にいるから、迎えに行つてすぐ試合に戻ると言つて聞かない。数人で取り押さえて、何とか試合には出したけどな」

信じられない？と小首を傾げたキルクスに、ベルティスは無言で頷いた。彼は笑った。

「俺もそうだけど、誰かのために戦っている奴はそいつに自分の戦いを認めて貰えないのなら、戦っても無駄だと思つてしまふんだ。」

もう、どうでも良くなつてしまふんだよ」

キルクスの手がポンポンとベルティスの頭を軽く叩いた。大きな

手。暖かい。

ふと、キルクスの左手首を飾る腕輪が目映った。キルクスの太い腕にその腕輪は細く、だが、存在を主張しているかのように銀色に光り輝いていた。

ベルティスの視線に気が付いて、キルクスは軽く左腕を上げて見せ、微笑を浮かべた。

「特別に見せてあげよう。ほら」

いいの？と聞き返すと、目だけで頷かれる。ベルティスはそっと触れながら、その腕輪に見入った。

既婚者はその証として腕輪を身に着けることになっている。

古くは結婚指輪というものがあつたのだが、一夫多妻制を敷いてから指が足りないと言い出す者が現れた。

故に、お互いの名前を彫った腕輪をお互いに身に着けることで結婚の証とするようになったのだ。

決まりはないが大抵、腕輪は左腕にする。左腕に収まりきらない場合、右腕に。それでも足りない時は足首にしても良いことになっている。

ただし、これは男の場合であり、女は左腕に一つしか身に着けられない。一夫多妻制の社会だからだ。

ほっそりとした腕輪の外側に彫られた文字を見つけて、思わずベルティスは声に上げてそれを読んだ。

「シン……？」

「そう、シン。俺の大事な女。今度エルドと一緒に家に来いよ。会わせてやるから」

頷きかけて、ベルティスは怪訝な顔をした。  
「一つだけ？」

腕輪の数のことだ。レース優勝経験者であるキルクスならば、さぞかしもてるだろうに、どうして一つしか腕輪をしていないのだろう？

男であるキルクスから求婚を断ることはできない。キルクスがシ

ンをたつた一人の妻だと心に決めているとしても、キルキスのことを好きになつてしまふ女がシンの他に現れば、キルキスの腕輪は増えていくはずなのだ。

だが、キルキスの腕には一つしか腕輪がない。キルキスが婚姻を結べる年齢になつてから二年も経っているのに、だ。

キルキスの瞳がふつと和らぐ。

「この一つだけの腕輪を手に入れるために、俺はレースで優勝したんだ。エルドもきつとそうだよ」

「どつという意味？」

困惑がベルティスの顔に浮かぶ。レースで優勝することに意味なんてあるのだろうか？

そりゃあ、ずっと訓練を続けてきたのだから、自分の強さを示すために優勝を目指すのは当然だろう。

誰だつて負けたくない。やるからには勝ちたいと思う気持ちは正しい。

エルドだつて、人一倍負けず嫌いなものだから、レースに参加するからには優勝したいのだと思う。

このくらい勝ち進めば男になれるだろうところまで勝てたとして、その次の試合をわざと負けるってことは、普通、しないものだろう。

勝てるどころまで勝ちに行く。そういうものだと思う。だけど。

「優勝することに意味があるわけ？」

「しなければ意味がないのさ」

キルキスが己の左腕を愛おしげに見つめ、腕輪に軽く唇を当てた。優勝すると、その場でホルモン剤を貰えて、求婚できる。つ

まり、そうしたい相手がいる者こそが優勝する資格があるってわけだ。人は自分のために戦うよりも、誰かのために想つて戦う方が強くなれるものだからな」

例えば、自分のためだから勉強をしろと言われても、する気にな

れないだろう。

だが、もし、君が次のテストで満点を取らなければ大切な友人を殺す、と言われたら、必死で勉強するだろう？

そんなおかしな例え話をキルキスは上げて、淡く笑った。

「俺もエルドも、シンや君のためなんだ。誰にも負けない力でシンを守りたいから、俺は強くなったし、レースで優勝した。それほどにまで想っている女がいる男を、普通、他の女は敬遠するものだろう？」

ハツとして、ベルティスはキルキスの顔を見上げた。

「だから、腕輪が一つ？」

その人のために強くなりたい。そう誰よりも願った者が優勝し、結ばれる。

そうやって結ばれた二人をいつたい誰が妨げようと考えるだろうか。

「もちろん、過去の優勝者全員がたった一人しか妻を持たなかったわけじゃない。だけど、一人の女のみを愛することのできない社会の中で唯一そうすることのできる方法は、レースで優勝することだけだ」

優勝して、想いの深さを他に示す。それしかない。

言って、キルキスはベルティスの肩に手を置いた。階段を下りるよう促す。

「時間だ。決勝戦が始まってしまっ」

いつの間に、そんなに時間が経ってしまったのだろうか。迎えがなくとも、決勝戦には武道場に戻るつもりだった。

だけど、心のどこかでは、自分の預かり知らぬところで事が終わってしまえば良いのと思っていて、迎えが来なければ戻らなかつただろう自分がある。

迎えが来れば善し。来なければ一生ここに居たつていい。

ガラスは肌に冷たく、徐々に体温を吸い取っていくけれど、そのまま凍り付いてしまっても、ベルティスは構わなかった。

しかし、迎えは来た。エルドではなかったけれど。

キルクスは再び階段を下りるよう促して、静かに口を開いた。

「エルドは強い。だが、君がいなければエルドは勝てない。勝てたとしても意味がないからだ。ベルティス、武道場に戻ってくれねえ？」

ついに頷いて、ベルティスは階段を下りた。

観覧席に戻ろうとして、キルクスに引き留められる。エスカレーターを途中で降りたベルティスの躰を引き戻すと、武道場のサポーター席に行こうと言うのだ。

キルクスはベルティスのコーチ兼サポーターとして午前中からずっとそちらの席にいたらしい。

本来ならばベルティスがその席に座っているべきなのだ、と彼は眉を顰めた。

「最後の試合くらい君が座っているべきだと思うよ」

「エルドは……俺なんかが座っていて喜ぶかな？」

「ベルティス」

当たり前だろうという批難の色が滲んでいる声が響く。

だが、エルドが自分を確かに好きでいてくれるのだという自信が、ベルティスにはなかった。

キルクスは、エルドはベルティスのために戦っているのだと言うが、ベルティスにとってそれ自体が信じられない。

だって、エルドは好きだと言ってくれない！

「マーフを呼んだ方が……」

「ベルティス。エルドも悪いが、君も善くはない。君はエルドの何を見てきたんだ？」

振り向くと、キルクスは顔から笑みを消していた。ひどく硬い表情をしている。

「人は、自分に関しては鈍くなるものだが、君は特に鈍いんだな。」

それではエルドが哀れた。もっとエルドを信じてやれ。そして、君自身の想いも大切にやれ」

分厚い扉がキルクスの両手によって開かれると、ムツとした熱気がベルティスを襲ってきた。続いて、喧噪。

数年ぶりに立った武道場の床は堅く、足の裏に確かな感触を与える。

キルクスに背を押され一歩踏み出した時、エルドの顔を見つけた。灰色の瞳が大きく見開かれる。そしてすぐに向日葵のような笑みを満面に浮かべて、ベルティスに向かって両手を広げた。

「ベルティス！」

反響する。気恥ずかしかつたが、そのせいだけではない。

この武道場のどこかにいるエルドを想う者へ後ろめたさ。そして、エルドへの疑心が、彼の胸に素直に飛び込む行為を拒んだ。

キルクスに促されながらエルドの側まで行くと、俯いて、頑張つてとだけ小さく告げた。

試合開始直前の合図が鳴り響き、エルドが武道場中央に歩み出す。レースは何ら予想を裏切らずに進んだらしい。エルドの決勝戦の相手は、やはりアータルだ。

アータルは鮮やかに赤い前髪を片手で軽く掻き上げると、その腕を、歓声を上げる同級生たちに向かって掲げた。

そうして、次に、ベルティスに向かって真つ直ぐ指差す。

エルドの顔が強張ったのが分かった。当然、アータルがベルティスに言い寄っていることは、エルドの耳にも入っているはずだ。

エルドの手にしている剣がカチャカチャと音を立てて震えている。その音が激しく響くほど、エルドの怒りがベルティスには伝わってくるようで、ゾクリと鳥肌が立った。

長く笛が鳴った。ついに決勝戦の幕が上がったのだ。

キーン、と金属音が鳴り響いた。笛と共に駆けだしたエルドの剣がアータルの剣と激しく交わったのだ。

お互いにお互いの剣を押し合っているが、力は互角。そのまま膠着してしまい、ギリギリと不快な音のみを発し続けた。

「まずいな」

不意に頭上で舌打ちが聞こえて、驚いたようにベルティスはキルキスを振り返った。

「エルドの奴、頭に血が上ってやがる」

エルドがひどく怒っていることは言われなくても分かる。だけど、それは果たしてまずいことなのだろうか。

ベルティスが怪訝な顔をすると、キルキスは深く頷いた。

「アータルは、頭に血が上っている状態で勝てる相手じゃない。力で押して勝てる相手なら、冷静さを欠いた今の状態でも十分に勝てるだろうさ。だが、アータルは他の奴とは違うからな」

負けるかもしれない、とまではキルキスは言わなかった。だが、彼が呑み込んだ言葉は確かにそれだった。

ベルティスはぐつと唇を結んでエルドを見つめた。

キーン。響く不快感。一度離れた二人の剣が再びぶつかり合ったのだ。

ぐらりと躰が傾いだのは、エルドの方。ベルティスはハッと息を呑んだ。

「エルド！」

ベルティスが上げた悲鳴は、歓声とも罵声とも判断付かない多くの人々の声の中で掻き消えてしまった。

膝を着いてしまったエルドだが、まだ負けてはいない。勝負は、片方が降参を認めるか、戦闘不能になるか、誰の目から見ても勝敗が明らかになることで決まる。

エルドの瞳はまだ負けを認めていない。負けていない！

「エルド！」

再び叫ぶと、後ろからキルキスに腕を腹に回されて躰を拘束される。彼の目にはベルティスが今にも戦いの中に飛び込んで行きそうに見えたのだろう。

構わず、ベルティスは声を張り上げた。

「エルド！ 俺、そいつにキスされた！ すごく嫌だった！」

ひどい喧噪の中だが、エルドの耳には届くはずだ。エルドがベル

テイスの声を聞き逃すはずがない。

「すごく嫌で、すごく悔しかったんだ！ だから、エルド！ そんな奴、早くやつつけてーっ！」

カラン。軽い音が響いた。エルドが剣を捨てたのだと分かったのは、一瞬後だった。

皆、啞然とする。素手で戦っても良いとは言っても、剣で向かってくる相手に剣なしで向かう者はいない。

剣を手放すこと。それは同時に負けを意味した。

だが、エルドは捨てた剣が音を立てると同時に、呆けて隙を見せたアータルの胸元深くに飛び込み、その躰を力一杯殴り飛ばした。

吹っ飛んだアータルは床に尻を着くと、間を置かず繰り出されたエルドの蹴りで更に遠くに転がる。

瞬く程の早さだった。アータルの手から離れた剣を拾うと、エルドは転がるアータルを見下して、その首筋に剣先を突きつけたのだ。

「勝者、エルド！」

長く長く笛の音が鳴り響き、それを掻き消すかのような歓声が響いた。

## 5・好きだって言え!

エルドが勝った。

始まりの苦戦が嘘のような、あっけない勝利だった。信じがたくて、ベルティスは実感が湧かない。

喜びがなかなか訪れてくれなかった。

アータルに手を差し伸べ起きあがらせると、エルドは礼を取り、ベルティスの方へと戻ってきた。

「ベルティス」

声の響きが低い。怒っているような響きだ。ベルティスは思わず身を竦めた。

「アータルに何されたって？」

「……」

「……どこ？」

とつくに耳に入っていることだと思っていたのだが、エルドの耳にはまだキスのことまでは入っていなかったらしい。

おずおずと右手を差し出す。手の甲にアータルからキスを受けたのだ。

エルドは身を屈めて、アータルと同じようにそこに唇を押し当てた。

数日ぶりのエルドの唇。ドキリと心臓が飛び跳ねた。

「ここだけ？」

手の甲から唇を話すと、エルドは上目遣いでベルティスの顔を覗き込んだ。

「うっん、違う。手の甲だけじゃない。」

「あと……」

唇。言葉にして言うのを躊躇われて、そっと指先を己の唇に触れさせた。

エルドの眼にカツと怒りが走るのが見えた。そして次の瞬間、抱き締められ、きつく唇を塞がれる。

苦しい。エルドの力が強すぎて、躰が軋むくらいに痛かった。だけど、嬉しい。

しばらく触れることも言葉を交わすこともなかったエルドが、今はこうして誰よりも自分の傍にいてくれている。

コホン、というわざとらしい咳が聞こえ、ようやくベルティスはエルドから解放された。

見やると、いつの間に二人の側に白衣を着た男が立っていた。

「エルド、優勝賞品はいらぬのかね？」

「まさか」

笑って答え、エルドはベルティスの躰を抱え込んだまま自分の腕を捲った。

それがホルモン剤なのだろう。白衣の老人は、皆が固唾を呑んで見守る中、差し出された腕に注射を打ち込んだ。

「錠剤もあるらしいんだけど、注射の方が即効性があるんだってさ。それに、錠剤は何日か続けて飲まないといけぬらしい。面倒臭いだろう？」

注射跡を確認しながら、いかにもエルドらしいことを言う。だが、その次は頂けない。

それがどんなにエルドらしくても、さすがにベルティスは逃げ腰になった。

老人はベルティスの分の注射も用意していたのだ。

「逃げるなよ、ベルティス」

エルドの押さえ込まれては、どうしようもない。差し迫ってくる注射針にひたすら顔を青くした。

「ちよつと待つてよ！ 俺はまだ女になるとは言っていない！」

いや、女にはなるけれど、エルドの女になるとは言っていない！

力一杯抵抗したが、あえなく注射を打たれてしまう。エルドにと

ってベルティスの抵抗など、抵抗の内に入らないのだ。

「ひどい……」

ぐっと目頭が熱くなった。泣きたい。泣き叫んでやりたい。

まだエルドから好きだって言われていないのに。

エルドはベルティスの気持ちを無視して、無理矢理ベルティスを女にしてしまったのだ。

どうして言ってくれないのだろうか？ たった一言を聞きたいだけなのに。

注射を打たれたたってことは、女性ホルモンをレース優勝者であるエルドから受け取ったことになるのだろうか。

それはつまり優勝者からの求婚を受けたことになるのだろうか。

もうすでにエルドと結婚してしまったってこと？

公認の夫婦になってしまったってことなのだろうか？

認めてない。まだ承諾なんかしていない。好きどころか、結婚してくれの言葉もなく自分は結婚させられてしまったということだろうか。

酷すぎる！

「エルドなんか嫌い。大嫌いだ！」

どん、とエルドの躰を突き飛ばした。そうできたのは、エルドの瞳が怯んだから。

言われるとは予想すらしていなかっただろう言葉を、ベルティスが言っただけだからだ。

茫然自失となった彼を一瞬可哀想に思ったが、それを上回る思いにベルティスは駆られていた。

離婚してやる。即、別れてやる！

それでも彼が自分を妻に望むのならば、ちゃんとした言葉で求婚してくれない限り、領かないつもりだ。

何としても言わせてやる！好きだって。

それでも言わないようならば、もう知らない。エルドなんて知らない！

キツと睨み付けると、エルドが正気を取り戻す前に彼の前から走り去った。

分厚い武道場の扉を体当たりして開け、廊下に飛び出す。駆けて、駆けて、行き着いた場所を見渡して、自分の行動パターンの乏しさに笑った。

いつもの場所だ。ここでエルドを待とう。

来るなら善し。来なければ一生ここに居たつていい。

ガラス張りの床に身を横たえると、じわりじわりと体温を奪われていく。

こうしてエルドの迎えを待っている自分は、やっぱりエルドがどうしようもなく好きなのだ。

エルドも好きだと言ってくれたら、すべてを許して彼のものになってもいい。

どうしても言ってくれないのなら、凍り付くまでここにいて、ゆっくりと死んでいこう。

彼以外の男のものになんてなりたくない。彼が手に入らないのなら、他に何も欲しくない。

何もいらぬ。

冷えた指先が痺れてきた。胸が苦しい。いつもよりも寒くて、躰がどんどん冷えていくようだった。

苦しい。胸が痛い！

未だかつて感じたことのない胸の痛みに、ベルティスは躰をよじった。

何かが躰の奥ではち切れようとしているかの痛み。その痛みは次第に下へ下へと移動していき、今度はズンと鈍い痛みを下腹部に感じた。

「うっ」

呻いて、床を転げ回った。身体を粘土のように引き延ばされたり、丸め込まれたりしているかのような感覚だった。何かが躰のどこかで変化している。

痛い。苦しい。何かに縋りたくて必死に腕を伸ばしたが、冷たい床の上で指先が滑るだけ。

胸元を掻きむしった時、両胸が大きく膨らんでいることに気が付いた。

まるで女みたい。

ハツとして床に両手を着くと身を起こし、映った自分の顔を見やっただ。どこが違うということはない。確かにいつもの自分だ。

だけど、何かが違う。ガラスに映った自分の顔に手を置き、もう一方の手で生身の自分の頬に触れた。

頼り無げに映る自分の姿は、明らかに女だった。

丸みの取れた顔立ちは幾分か大人びて見える。金糸のような髪は今まで通りだが、ぱっちり開いた瞳は大きく、睫毛は目の下に影を落とすほどに長い。

紅を塗ったわけではないのに、桜色に染まっている唇。

薄く唇を開くと、瑞々しく潤ったそれは何かを求めているようで、ガラスに映った自分にベルティスは頬を染めた。

会いたい。すぐに。今すぐ抱きしめてくれなければ、いやだ！

自分をこんな風にしてしまった責任を取って欲しい。ベルティスの中に芽生えてしまった女が、エルドを求めて仕方がない。

抑えがたくて、苦しくて。彼が恋しくて、切ない。

床に座り込むと、ベルティスは自分自身を両腕で抱きしめた。一刻も早くエルドにそうして貰いたいのだ、と。

堪らず、彼の名前を呼ぶ。

「エルド」

「なんだよ？」

間を置かず返された返事に、ベルティスは呆気にとられた。

振り返ると、簡易階段を途中まで上ったエルドが、頭だけを床から出してベルティスを見つめていた。

カン、カン、カン。音を響かせて残りの階段を上りきってしまうと、ベルティスの正面にしゃがみ込んだ。

「うん。うん。思った通り、善い女になったな」  
ベルティスの頬に触れ、上機嫌である。そんな彼もどこか今までと違う。

どこが違うとは正確に言うことは出来ないが、一つ言えることは彼を取り巻く雰囲気はずっと大人びて感じられるということだ。

男になったんだ。

思わず見取れてしまう。だが、つい先ほど自分に対して嫌いだとハッキリ口にしたのだ。

そんなこと、まるで忘れてしまったかのように、ごく自然な態度で自分に接してくるこの男がベルティスには信じられなかった。

急激に気持ち冷え、ベルティスはエルドから顔を背けた。

自分が何を言っても、エルドは堪えないのだろうか。

だとしたら、いくら願ってもエルドから好きという言葉は貰えない気がする。

ズン、と心が沈む。床を擦り抜け、宇宙空間をどこまでも落ちていく。そんな錯覚に陥った。

「ベルティス」

俯いてしまったベルティスの顔を、エルドがやや乱暴に上に向か  
せた。

そつと唇が触れ合う。だけど、触れるだけ。すぐに離れていった唇を目で追うと、それは静かに言葉を発した。

「好きだ」

思考が停止する。何を言われたのか、すぐには分からなかった。幾度か瞬きを繰り返している間、嬉しさと怒りが交互に訪れて、一瞬ずつベルティスを支配して去っていった。

感情に取り残されたベルティスは、ただただエルドを見つめ返す。どうしてこんなにもあつさり言ってくれるのだろうか？

あれほど求めた言葉だったのに。するりと容易にエルドの口から飛び出して来るものだから、ちつとも有り難みがない。

だけど、ついに言ったのだ。そう、言わせたことには変わりはない

い！

コクリと咽を鳴らせて、ベルティスはエルドの次の言葉を待った。「好きだ、ベルティス。これからは何度でも言う。だから、ずっと傍にいる」

否はない。だって、ベルティスもエルドのことが誰よりも好きだから。

「うん。……けどっ！」

頷いた一瞬後に言い放った逆接の言葉に、エルドの顔が明らかに引きつった。

案外、エルドにとってベルティスの拒絶は大きなダメージを与えられるのかもしれない。

先ほどの、エルドなんて嫌い、というベルティスの言葉も実のところちゃんと利いているのではないだろうか。

強がりで、負けず嫌いの彼だから、そんな様子などおくびにも出さないだけ。

エルドがそんなんだから、ベルティスは迷うのだ。

もっと分かり易い性格だったら、安心して傍にいられるのに。

「……今まで一度も好きだって言うてくれなかったのに、いきなり言うし」

「……」

「俺に嫌いだって言われて、焦っちゃったわけ？」

エルドの怯んだ瞳を見て、我ながら言い方がキツイと思ったが、言わずにはいられなかった。

これだけはハッキリさせたい。エルドがやっとな口にしてくれた好きという言葉が、逃げそうになった鳥かこの鳥を引き留めようとして、とっさに口にした言葉ではないことを。

否定の言葉を絶るような思いで待ち、だけど、わざと冷たい表情をしてエルドの顔をじっと見つめた。

「違う。俺は端から、俺が男になって、お前が女になったら、お前に好きだって言うつもりだったんだ。ガキが口にする好きだって言

葉なんか当てにはならないだろう？ 花が好き、蝶が好き、星が好き、誰とかちゃんが好きだ、誰とか君が好きだって。そういう好きと同列に並べられるのがオチだろ？」

いつになく真剣に言われて、ベルティスも真面目にエルドの言葉を聞くとうと姿勢を正した。

「自分の言葉に責任を持てるようになってから、お前に言いたかった」

責任。

ベルティスは目を見開く。エルドにとって好きという言葉は、単に好きという想いとその響きではなく、ずっと傍にいたいという想いと夫婦になりたいという響きに直結するのだ。

18歳になりレースを終えるまで、結婚することはできない。

そうできるようになってから、責任を持って言いたかったのだと、エルドは言う。

重い。エルドの好きは、ベルティスが求めていた言葉よりもずっとずっと重い言葉だったのだ。

「エルド、あのさ……」

ごめんと呟いて、ベルティスは頂垂れた。

ずっと誰よりも傍にいたのに。18年間、あの育児室で出会ってからずっと一緒にいたのに、自分はちっともエルドを分かっていたいなかった。

情けない。エルドと同じように成長してきたつもりだったのに、エルドの方がずっとずっと大人だ。

ぐっと、ベルティスは拳を握りしめた。

「ベルティス」

穏やかな声がベルティスの耳のすぐ側で響いた。顔を上げると、驚くほどエルドの顔が近くにあった。

「お前、知ってる？ お前さ、今まで一度も俺のこと好きだって言ったことないんだぜ？」

「え？」

目を大きくすると、堪らないとばかりにエルドは笑い声を上げた。  
「ほらな。やっぱり気付いていなかった。お前は心の中で何遍も俺に好きだと言っていたかも知れないけど、俺は一度たりともお前の口から好きだって聞いたことねえよ」

「うそ」

「こんなことで嘘ついても仕方ないだろ。ほら、言えよ。俺が好きだって。好きなんだろう？」

不敵な笑みを浮かべて、エルドは言う。なんだかとても悔しい。だから、しばらく沈黙を作ってやると、不意にエルドの瞳が陰りを帯びた。

「早く言えよ。……不安になるだろ」

「そうか！ そうなんだ！」

いつだって余裕ぶってベルティスの手を引いてくれるエルドも、不安は感じているのだ。

エルドとベルティスに成長差なんてものはない。同じように成長してきたから、同じように不安を抱くのだ。

相手の言葉に一喜一憂してしまうのは、エルドも同じ。

だからこそ、不用意に嫌いだなんて言うてはいけないし、まして好きだなんてそう簡単には言えない。

好きという言葉は、誰よりも大切に愛して止まないたった一人のために、囁くように言うのだ。

「好きだよ、エルド」

言つと、エルドは破顔して、力の限りベルティスの躰を抱き締めてくれた。

完

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6341d/>

---

B e l t i s

2009年3月25日13時19分発行